

音楽科教科主張

1. 音楽科における学び

子どもは、魅力的な音や音楽に出合うと「楽しそうな曲だから歌ってみたい」「好きな感じだからもっと聴いてみたい」「なんで心地よいんだろう」「どうすればこんなふうに演奏できるのかな」など、様々な思いをもつ。そして、その音や音楽と関わる中で、自分の目指す表現が生まれ、音と向き合いながらくり返し試したり、友達と対話しながらよりよい音楽表現になるように吟味したりするなど、試行錯誤をしていく。そうすることで、徐々に目指す表現と音楽を形づくっている要素とが結びつき、知識や技能を獲得していきながら、音楽的な見方や考え方を広げたり深めたりしていく。そして、音楽を形づくっている要素の働きが生み出す面白さや美しさを実感することで、子どもの感性が高まっていくだろう。そして、新たな音や音楽に出合った時、それまでの経験を生かしながら自分の目指す表現に向かって活動したり、音や音楽を味わったりすることができる。

このような学びをくり返していくことで、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わり、生涯にわたって音楽に親しんでいくようになるだろう。

2. 本校音楽科部が考える『その子らしく学ぶ』

音や音楽に出合った時にもつ思いは「初めて聴くな、何の音だろう」「いろんな楽器の音がした」「この曲は速いな」とその子によって違う。そこには、今までの経験や感性などの「その子らしさ」が影響しているだろう。そうして思いをもった子どもは、音や音楽に自然と関わり始める。そして、自分の思い描く音を探そうと様々な楽器に関わったり、わずかな音の違いにこだわって最後までじっくり向き合ったりするなど、目指す表現に向かって何度も試行錯誤をしていく。

その中で子どもは、音楽を形づくっている要素を手掛かりにして「その子らしさ」を発揮していく。例えば、音色の違いを手掛かりにした子どもは、様々な楽器の音色を鳴らしながら「どんな音が物語の様子に合っているかな」と感性を働かせ、自分の目指す表現に合った楽器を選択したり「もっとイメージに合う音にするにはどうすればいいんだろう」と楽器の叩く位置や叩き方を工夫しながら目指す表現に近づけたりしていく。また、拍を手掛かりにした子どもは、グループで考えたリズムが四拍子の拍に合っているかどうかを聴きとり、拍を意識して演奏することができるよう声で「1、2、3、4」とカウントをとったり「みんなで音を合わせたい」という思いをもとに「みんなの思いを一つにして全ての楽器の音色が聴こえるような合奏」という目指す表現に向かって、小太鼓で拍を刻んで音や演奏をそろえようしたりする。さらに、他者と関わることで「音をそろえるための小太鼓」から「曲を盛り上げるための小太鼓」へと楽器の役割を変容させていく。

このように、自分の目指す表現に向かって試行錯誤する中で、音楽を形づくっている要素を手掛かりにしたり、自分の経験や感性をいかして他者と関わったりする姿が音楽科における『その子らしく学ぶ』であると考えている。

3. 『その子らしく学ぶ』を支える環境設定

○題材構想の工夫

題材を構想する際には、扱う曲と活動の関連性を考えていく。また、目指す表現や話し合う視点が明確になるように、題材で主に扱う要素を絞る。そうすることで、目指す表現が明確になり、より『その子らしく学ぶ』を支えることができると考える。

○材との出会いの場の工夫

子どもにとって材との出会いは、その子の経験や感性に大きく影響すると考える。そのため、その子の思いが生まれるような場を設定する。

○目指す表現に向かって試行錯誤できるような環境の工夫

その子が目指す表現に向かって試行錯誤することができるよう、自分の思いや意図を考えたり表現したりする時間や友達との交流する場を設定したり、グループの分け方を意図的に工夫したりすることで、より『その子らしく学ぶ』を支えることができると考える。